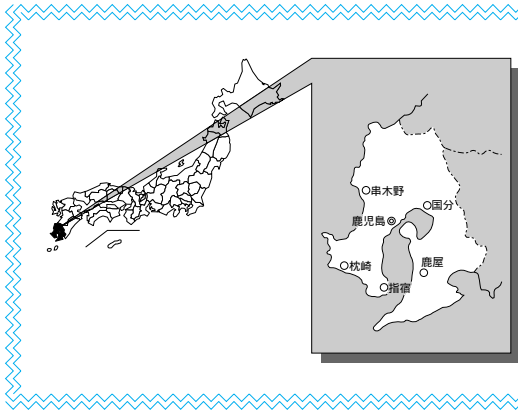


土木紀行

かごしまこうきゅういしづみぼうはてい 鹿児島港旧石積防波堤

かごしまけんかごしまし
鹿児島県鹿児島市



概要

鹿児島港は島津氏により12世紀の中頃には開港されたとされている。その後何度かの修築・拡張工事が行われ、本港区、新港区など大まかに4港区に区分される現在の姿となっている。鹿児島港旧石積防波堤は、本港区の北埠頭にあり、全長約345mの防波堤である。この防波堤は、新波止(139.0m)、第一防波堤(87.8m)、一丁台場(117.9m)の三つに分かれている。

鹿児島港旧石積防波堤の変遷

鹿児島港の防波堤の記述が、「鹿児島縣維新前土木史」にある。これによると『往時の鹿児島港平面圖に示すが如く幾多防波堤の築造ありたり。其内鍋屋岸岐は鶴江崎より南西に突出す。年代不詳なれとも最も古し。屋久島岸岐及辨天波止は安永年間(1776~1780年)の築造に係る。或は文政年間(1818~1829年)ともいふ。二者とも昭和の築港工事にて之を撤去したり。三五郎波止は一名東風除岸岐と呼ぶ。天保十二年(1841年)頃の築造なり。工人は岩永三五郎なるを以て其名を冠す。新波止一名新臺場は弘化嘉永(1844~1853年)頃の築造に係る。タデ草岸岐は辨天波止の北

端より南北に亘る防波堤にして嘉永年間の築造なりしが、明治五年一丁臺場築造の時之を撤去し石材は一丁臺場に利用したり。後略(句読点に著者の追加分あり)」と記されている。

現在の鹿児島港旧石積防波堤を構成している新波止が江戸時代に、一丁台場が明治時代に築造されていたことが伺われる。このときの新波止の延長は309mであった。上記に記載されている防波堤の位置関係を図1に示す。この地図には一丁台場の名称が記載されていないが、昭和10年に発行された「鹿児島港修築工事誌」に添付されている地図には、地図1とほぼ同形の新波止の南部が一丁台場と記載されている(図2の緑で囲まれた部分)。明治40年、昭和2年の地図にも一丁台場という名称は見当たらないが、「鹿児島縣維新前土木史」の記述通りとすると明治5年からは一丁台場は存在していたということになる。

その後さらに新たな修築工事が行われ、新波止は139mの長さを残して一部撤去され、一丁台場と南端で繋がっていた北防波堤は切断されている。鹿児島港旧石積防波堤の横には鹿児島フェリーターミナルがあり、鹿児島と桜島を結ぶ24時間営業のフェリーが、部分撤去された新波止の跡地を通過して運行されている。現在は、防波堤という



写真 1 新波止



写真 2 一丁台場

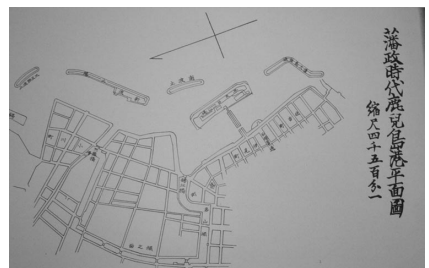


図 1 藩政時代の防波堤

姿ではなく、鹿児島港旧石積防波堤の海側が埋め立てられ、そこに建設された「いおワールドかごしま水族館」の護岸としての役目を担っている。

鹿児島港旧石積防波堤の文化的価値

名前の示すとおり石積みの巻石防波堤である。新波止の石積みは緩やかな曲面を描いている。一方、一丁台場の斜面は階段状の石積みである。新波止と一丁台場を結ぶ第一防波堤は、新波止と同じような美しい曲面を持っている。新波止と第一防波堤の違いは、石の積み方である。新波止の石積みは、目地に何の処置も施していない単なる積み上げで古さを感じるし、石自体も若干の不ぞろいさがある。これに対して第一防波堤は、ほぼ同形の石が整然と積み上げられ目地にはモルタルが埋められて堅固さを感じさせる。第一防波堤の石には石工たちの名前が刻まれており、当時の施工者たちの自信と誇りが感じられる。

鹿児島港旧石積防波堤は、石積防波堤として全国でも最大規模の威容を誇っている。規模の大きさからも当時の技術的な高さが垣間見える。意匠的にも石積みの曲面の形状の美しさを含めて高い評価を与えることができる。また、先に記述したように新波止は、すでに弘化・嘉永年間には築造されているので、150年以上経過している。一丁台場は、明治5年に築造されているので、130年以上経過している。年譜的にも歴史的価値の高いものとなっている。

2003年には、選奨土木遺産として認定され、2007年12月には国宝・重要文化財（建造物）部門で重要文化財に指定された（登録名は、鹿児島港旧港施設で、第一防波堤は遮断防波堤となっている）。

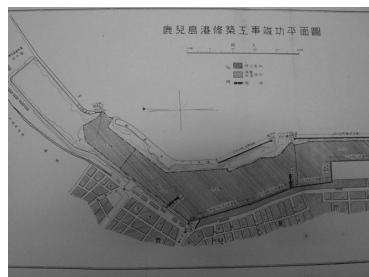


図 2 昭和10年頃の防波堤



写真 3 名前の刻まれた石



写真 4 鹿児島港旧石積防波堤といおワールド

鹿児島港旧石積防波堤の現状

鹿児島市の海の玄関口である鹿児島港は、JR鹿児島駅から徒歩10分の位置にあり、立地条件にすぐれているが、近年ウォーターフロント再開発が行われ、本港区北埠頭にある鹿児島港旧石積防波堤はその対象地域の一部となった。新波止の一部は撤去されたが、明治天皇行幸所船形台場の碑や薩英戦争のときの砲台跡などは残されており、歴史の重さを感じさせてくれる。

この地を実施された埋め立て工事の後、「いおワールドかごしま水族館」が建設されたが、防波堤はその一角に含まれることになった。こうして防波堤としての役目が終わり、護岸としての役目を担うことになった。「いおワールド」との連携として、飼育されている海豚の遊泳地の一部としても利用されるなど、鹿児島港旧石積防波堤の新たな役目も担っている。

また、近くには「ドルフィン・ポート」も造られ、多くの市民・観光客の訪れる施設との一体化も進められている。特に、本年は篤姫ブームにより「ドルフィン・ポート」の一角に作られた篤姫館に訪れる多くの観光客の目に触れる土木遺産となっている。水族館や商業施設も含めた新たなウォーターフロントとして整備されたことになるが、その美しさは損なわれることなく、市民の憩いの場所として保存活用されていることは幸いである。

【参考資料】「鹿児島縣維新前土木史」

「鹿児島港修築工事誌」

【監修】鹿児島大学工学部 准教授 二宮公紀